

# 被爆 世界に語り30年

姉を失った岡田恵美子さん(79)



原爆の惨状を広島から世界へ発信し続ける被爆者がいる。原爆で姉を失った広島市東区の岡田恵美子さん(79)だ。30年にわたって自らの体験を国内外で語り継ぐ一方、核保有国の首脳に対し、広島を訪れて被爆の実相に触れてほしいと訴えてきた。5月、原爆を投下した米国の現職大統領として初めてオバマ氏が広島に来たことを「核なき世界」実現へのスタート」ととらえ、若者たちへの語り部活動を続ける。

## オバマ氏「今こそ広島学んで」 訪問実現

「私は夕焼けが大嫌い。広島市の夜空を真っ赤に燃やしたあの日を思い出して胸が苦しくなるの」

2日、広島市中区の広島平和記念資料館。岡田さんは東京から平和学習で訪れた中高生約40人を前に講話した。生徒たちは皆、熱心に耳を傾けていた。

8歳の時、爆心地から2・8キロの自宅で被爆。燃え盛る火の中、母親、弟と必死で逃げた。目玉が飛び出

した黒焦げの幼子、「殺し爆で戦争は早く終わったてくれ」とうめく声、防火水槽に頭を突っ込んでいた死体。当時の惨状を話せば、今でも涙がにじむ。12歳だった姉は行方不明のまま、帰らぬ人となった。自身も被爆後、腹痛と嘔吐で動けず、頭髮は抜け、歯茎から出血が続いた。現在も再生不良性貧血と闘う。

思い出したくもなかった被爆体験を語り始めたのは1986年ごろ。被爆者の米国派遣事業に参加し、米国の平和運動家、故ハーバラ・レイノルズさんに出会った。レイノルズさんと一緒に集会所や学校、教会を回りの、原爆の惨状について話した。当時は米ソ冷戦時代。米国人たちは核廃絶の訴えに聞く耳を持たず、「原爆に学ぶスタートラインにしたい。各国の若者たちが手をつなぎ合って、核兵器廃絶へ行動を起こしてほしい」と願う。(御厨尚陽)

東京から来た中高生に講話する岡田恵美子さん  
11日午後1時、広島市中区の広島平和記念資料館